
かくれんぼ

Maurice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かくれんぼ

【著者名】

Maurice

N5060C

【あらすじ】

高校生雄太が体験する恐怖の遊び。

序章

「早坂！早坂！」

なんだ？誰かが自分を呼んでる気がする。

「おい起きうつて。」

かすかに声が聞こえてくる。

「雄太！」

雄太？俺の事か？意識がはつきりしてきた雄太は目を開けた。

「早坂、授業中だぞ。」

目の前には見慣れた先生が立っていた。

「おい雄太、お前いびきかいてたぞ。」前の席の親友の智樹が笑いながら話しかけてきた。

「ああ悪い悪い。最近寝不足でね。」雄太は目をこすりながら言った。

「しかし、授業つまんねえな。」

そんなに勉強が嫌なら高校に進学するなよと内心、雄太は思った。

「何か面白いことね～かな～」智樹は続けた。

「世の中そんなもんだって」雄太は冷静に言った。

人間は生まれ、義務教育を終え、働いて死ぬ。人間なんてあつけないものだ。法律では人は生まれながらにして平等だと言つ。しかし、現実は生まれた環境による差が激しい。金持ちの家に生まれた子供は何も問題がない限りは不自由ない生活を死ぬまで送れる。一方、中流家庭以下のいわゆる貧しい家に生まれた子供は何かと不便な生活を強いられる。

金持ちは一流学校へ、貧乏人は一流三流の学校へ。

生まれたときから人生のレールは敷かれているも同然だ。

雄太は日頃から生まれながらにして平等と言つ言葉を嫌っていた。平等？どこが？馬鹿馬鹿しい。

世の中には生まれたときから絶望的な毎日を送る人が何千、何万人もいる。

学校へ行きたくても行けない人が沢山いる。それが日本はどうだ？高い金払つて高校へ進学しても事業中はみなせつせと携帯に精をだしている。

「智樹、智樹。」智樹が振り向いた。

自分でも後で気づいたが雄太は偉そうに言った。

「世の中にはな学校で学びたくても学ぶことが出来ない子供が大勢いるんだよ。
つまんねえとか言つくなよ。」

智樹が笑いながら言った。「居眠りしてたお前が偉そうに言つなよ。

「

確かに言つてることとやつてることが違うな。
雄太は自分の矛盾に気づき、恥ずかしくなった。
そういうしてゐうちにチャイムがなつた。

キーンゴーンカーンゴーン

「よつ！」親友の一人の玲が声をかけてきた。

「今日はどうする？」

「悪い。俺これからコンビニのバイトなんだわ。」智樹が言つた。

「しゃあねえな。」

「雄太は？」

「俺もバイト。ほらテパートの清掃。」

「清掃？大変だな頑張れよ。じゃあ俺は家でゲームでもするわ。」
玲は少しあびしげに言つた。

「じゃあまた明日な」

「じゃあな」智樹が返事をした。

「わあてコンビニ行かないと。じゃまた明日。」

「おつ」雄太は智樹に別れを告げ、バイト先へ向かつた。

今日もこつむと変わらない日だと思ひながら・・・

デパートと高校は反対のため雄太は学校を出て一度家に帰つた。携帯の時計を見ると5時前。

「ただいま」

カバンをドサッと玄関に置いた。と言つても家には誰もいない。

雄太の家は父、母、妹の典型的な4人家族。両親は共働きで妹の詩織は中学生。

地元では名が知れたプラスバンド部のため毎日帰りは7時を過ぎる。父は大手出版代理店の部長。母はスーパーでパートをしている。大体7時過ぎに皆帰宅するため、学校を終えて帰宅した5時には大抵人はいない。

清掃の仕事は6時から。

5年前に建てた家は雄太がヨーロッパ風のデザインが好きだったため洋風調になつている。

鉄筋造りの一階立て。屋根の部分は三角。

二階のベランダはバーべキューができるほど広々としている。

そして至るところに花が飾られている。一階にはウッドデッキがあり、木のテーブル、椅子が置いてある。カバンを置き奥の台所に向かいジュースをごくり。

「ふ〜」

リビングに行き朝刊を広げる。ろくなのねえな。
見たい番組がなかつたため、すぐに2階に上がり私服に着替えバイトの準備をする。

「さあてと」

時計を見ると5時20分。一階に降りドアにカギをかける。
芝生の庭を歩き自転車に乗る。バイト先のデパートまでは20分ほど。

「よつしゃ今田も頑張るか。」

ゆつくり自転車を漕いでいると涼しい風が体を突き抜ける。
周りを見渡せばビルが多くなり人通りも増えてきた。
雄太がアルバイトをしているデパートに近づいていることを伺わせる。

デパートの裏にある従業員専用の駐車・駐輪場に着き、携帯を見る
と5時50分。

デパートは5階まであり従業員休憩室は3階にある。

「お疲れさまです！」

「お早う。」

そこには今日のパートナーの小出がいた。6時からの清掃は一人でやる。

小出は30歳の女性。大学卒業、就職できずアルバイトを転々としてここにきた。

所謂フリーターだ。体格はいくらか細めで身長は160中盤で髪はショート。

狐のような細い目をしているためキツさんと言われている。
見た感じはイマイチぱつとしない。

「キツヤんとやるのやこですね。」笑いながらキツヤんが言った。

「なに？ 嫌なの？」

「いやあ キツヤんは年齢が近いんで楽しいですよ」

「またあ」キツヤんは嬉しそうな顔をした。

そこへ12時から6時までのシフトの人達が来た。

「お疲れさまです。」

「お疲れ～」おばちゃん達は疲労の顔を浮かべている。

「よし行きましょう。」キツヤンが言った。
「行きましょうか。」

雄太達の仕事は先ず5階から1階まで男女のトイレを掃除していく。商品が並んでいる床はお客様がいまだいるため先にトイレ掃除を終わらせる。

それを終えたあと5階から順に床を清掃していく。
休憩室の隣にある清掃用具が入ったカートを運び、清掃員用のエレベーターで5階に向かった。
チーン。5階です。

カートをトイレの脇に置きトイレ掃除の準備をする。

「さて頑張りますか」

「はい」雄太は明るく頷いた。

デパートは8時に閉まるため8時までトイレ掃除を終らせて8時から床の清掃に入る。

雄太はこのバイトを気に入っていた。時給は800円でますます。何より人間関係が気楽で心地よかつたからだ。5階を終え4階へ。順々に清掃していく。

時間が経つにつれ客足も少なくなってきた。時計を見ると8時前。雄太は一階の男子トイレの清掃を終えカートに片付けていた。キツがモップを持ちながら来た。

「はあ～終わったよ。」

「お疲れです。」

雄太は続けた。「次は5階の床清掃ですね。」

その時閉店の知らせを伝える音楽が流れてきた。キツと雄太はエレベーターに乗る。

チーン。5階です。最初に異変に気付いたのはキツだった。

「あれ？おかしいわねえ。」

雄太が見渡すと電気がついておらず真っ暗だった。

「え？真っ暗ですよ。」雄太は不思議そうに言った。

いつもなら閉店した後も電気がついてるはずなのだが・・・

そのうえ不気味なほど静まり帰っている。キツが静寂を切り裂くように叫んだ。

「すいませ～ん。清掃入るんで電気つけてもらえますか～？」

応答はない。歩き回つても誰もいない。

「電気消して帰つたんじやないですか？」真顔で雄太が言った。

「そんなわけないでしょ。私達が清掃するの分かつてるんだから。」

キツは考えながら「うーん。まず管理人とこ行きましょう。管理人室へ行けば電気つけてもらえるから。」

「そうですね。じゃあ3階行きますか。」

管理人室は3階の休憩室の近くにある。チーン。3階です。

「え？」キツがポカーンとなつた。真つ暗・・・

「今日は清掃いらなかつたんじやないですか？」

キツは聞く耳を持たないで管理人室へ向かつていった。

雄太は休憩室へ行きおばちゃん達に事情を話そうとした。扉を開けた。

ここも真つ暗だつた・・・

「いつもならお茶を飲みながら雑談してゐるのに・・・」「徐々に雄太は不安になつていく。

とりあえず管理人室へ行つてみた。

「キツさんどうです？」

「誰も居ないわ。」

「どうします？誰も居ないんで帰りますか」

「そうねえー」

深く考え込んだキツは口を開いた。「今日は清掃できないから帰りましょー」

キツは気味悪さを感じていた。

「そうしますか。」変だなと思いつつ内心は早く帰れると思い嬉しかった。

カートを片付け休憩室へ戻り電気をつけキツと雄太は着替えた。

「今日は清掃必要なかつたね」

「でも管理人さんは特に何も言つてませんでしたよね？」

「きつと言つて忘れたのよ。」

雄太は深くは考えなかつた。エレベーターに乗り一階へ向かう。チーン。一階です。案の定真っ暗だつた。駐輪場に向かおうとした時正面の入口に張り紙が張つてあるのに気付いた。何だ？一人は見に行つた。張り紙にはこう書いてあつた。

合図・第3話

なんだこれは？子供の悪戯か？

雄太が先に口を開いた。

「キツさん」れ・・・？」

「何かしら？かくれんぼって・・・？」

「まさかこでかくれんぼなんかやりませんよね？」

聞くまでもないでしょ、という顔をキツは浮かべた。うん？下のほうを見ると日付が書いてあつた。

9月13日。雄太はポケットから携帯を取り出し画面を見た。
えつと今日は？9月13日。
まさか今日？

「キ、キツさん。」

「何？」

「今日がその日ですよ。」

「だから何？」

「いやだから・・・　かくれんぼが・・・」

「あなたこんなデパートでほんとかくれんぼなんかやると思つて
るの？」

やるわけないでしょ。」

雄太は今日の異様な光景に戸惑っていた。

「そ、そつすつよね。」

キツも誰もいないデパートに不気味さを感じていたが、この張り紙のことなど気にせず帰らうとした。

「や、帰るよ。」

「は、はい。」

雄太はどうしても気になつてしかたなかつた。昼間と違い静まり返つたデパートを一人は駐輪場に向かいながら歩く。一人の足音が1階じゅうに響き渡る。

コツコツ・・・

雄太は駐輪場に出るドアを開こうとした。え？
いつもなら簡単に開くドアが開かない。

「押すんじゃなくて引くんだよ。」

キツが横で不機嫌そうな顔をしている。

「引いてますけど・・・

「もう一へ何してゐの？」

邪魔よ、とばかりにキツが開けようとすると。
しかしふくともしない。

「何なのよ~」

「ふくともしないっすね。」

蹴つても叩いてもドアは変哲も無い。
まさか閉じ込め・・・
なわけないかと雄太は思った。

突然、誰かの声がかすかに聞こえた。
一人は耳を澄ましてみる。

「もひい～か～い？」

だんだん声が近づいてくる。

「もひい～か～い？」

声が聞こえるほうを見るとそこには小さな子供が立っていた・・・

女の子・第4話

こんな時間に子供? 迷子だらうか?

子供が近づいてくる。

小学校1年生だらうか?

女の子は上は白いシャツ下は赤いスカートを着て、頭はおかっぱで無表情な顔をしている。

「あらお嬢ちゃん、迷子になつたの?」返事はない。

「どうします?」

「そうねえ・・・」

そう言つとキツは考え込んだ。

雄太はなんでこんな面倒くさいことが起こるんだと、少しイライラしていた。

このまま早く帰りたくてしようがなかつた。

すると突然女の子が男のような力強い声で叫んだ。

「見つけた!」

その瞬間雄太は真っ暗闇に引きずり込まれた。

ううん・・・ここはどこだ?

雄太は目を覚ますと、大きな屋敷のような床の間にいるのに気付いた。

あれ?今までデパートにいたはずが・・・

どうなつてんだ?

雄太は今までの出来事を整理しようとした。するとまた、聞きなれた声が聞こえてきた。

「 もひい～か～い？」

雄太は本能でとっさに隠れてしまった。

落ち着いて周りを見渡すと縁側のほうに庭がある。庭には木組みの悠に2mはあるようなものが置いてある。なんだろう?

その時再びあの声が聞こえた。

「見～つけた～。」

雄太の目の先にはあの女の子とキツが写った。

「キツや～・・・」 雄太は言いかけたが声は出さなかつた。

キツは女の子に掴まれている。

「ちょっとなんなのよ?」

無言のまま女の子はキツを庭のほうに連れていぐ。

キツは木組みの台に頭を固定されもがいている。

「ね～ 何なの? そもそも何がどうなのよ?」

雄太が上を向くと銀色に輝く刃のようなものが見える。
キツの頭の上には銀色の刃。

雄太の頭に稻妻が走った。

「も、もしかして・・・」

「ギ、ギロチ・・・」

キツはもがいている。

その光景を目にして、雄太はあまりの恐怖で声がない。

女の子がボソッと言つた。

「バイバイ・・・」

どん！ 銀色の刃が振り落とされた。 ガツガツ・・・ 何かが転がつた。

雄太はその瞬間、顔を逸らした。 その光景を見るのが怖かつた。 これは夢だと思いながらゆっくりと振り返った。

そこにはキツの頭が・・・

雄太は余りの恐怖で声が出なかつた。 気分が悪くなり立ちすくんでしまつた。

女の子を見ると、笑みを浮かべていたがまた無表情な顔に戻つた。

そして

「もういいかい？」

雄太は体全体が身震いしたが、なんとか力を振り絞つて立ち上がりその場から逃げ出そうとした。

見つかつたら殺される。とにかく逃げなければ。 本能がそう言つていた。

縁側の反対側に木の通路があつた。 気配を気づかれないように足音を忍ばせ歩き出す。 きしむ音がしないようすり足で動く。 床の間を出て右を向くと玄関らしき物が見えた。

静かに向かう。 雄太の心の中は心臓がバクバク言つている。 冷や汗をかきながら玄関につき、これで逃げ出せると安心した。

しかし、開けようとしてもビクともしない。

「う、うそだろ・・・」

くそっ。どうすりゃいいんだ・・・

今きた通路を振り向くと左右に通路がある。雄太は右に行こうとした。

すると

「もういいかい？」

冷や汗が額を垂れるのを感じた。

右を見渡すと階段らしき物が奥のほうに見えた。

2階に逃げれば大丈夫か・・・

気づかれないようゆっくりと進む。

左側には部屋が数部屋あった。中を見ると写真らしきものが数枚見えた。

どれも白黒。亡くなつた人だろ？

男の写真の中に一枚だけ少女らしき写真がかけてある。

雄太は気になりじつくり見てみた。そこにはおかっぱの女の子が写っていた。

うん？何か見覚えがあるな。

その時後ろに気配を感じた。

あの不気味な声が聞こえてきた

「見つけた」

かぐれんぼ・第6話

その瞬間血の気が引くのが分かつた。

殺される！雄太は目の前の階段へ急いで向かつ！

心臓が今にもはち切れそうだ。それにしてもさつきの写真・・・

あの女の子に似ていたような。まさか。

一階も一階と同じような部屋の配置になつていた。

少し歩き真ん中まで行つたところで右を向く。

奥のほうまで部屋が続いていた。

ひとまず隠れなれば。

一番奥まで行き物置らしき部屋に入った。

辺りを見渡すとまざまな物が置かれていた。

本のようなもの、衣類、使わなくなつたのだろうが、人形や古いおもちゃも置いてある。どれも埃が被つている。バラバラと本を捲つていると下にアルバムらしきものが見えた。

これは何だ？

開いて見てみると白黒の写真が入つていた。

あの女の子の父親？

そこにはまだ若々しい30代ぐらいの男性が写つっていた。

次々捲ると男性と同じ年頃の女性も写つっていた。

そして女の子が笑顔で両親と遊んでいる写真が。

ふと気づくと夢中になつて写真を見ていた。

「もういいかい？」

背筋がゾクツとした。

声が近づいてくる。後ろを振り返った。

そこには『真の中の女の方と回じおかっぱ頭の方』が……

「お、同じだ……」

一階で見たのは……

死んだはずじゃ……

「見つけた！」

雄太は体が固まって全く動けなくなつた。

これが金縛りというやつか。

だんだん意識が薄らいでいく。

俺はどうなるんだ？

「へ、うう」

「大丈夫？」

目が徐々に開くとそこにはキツガ。

「キ、キツさん？ 死んだんじゃ？」

キツはおかしな顔をした。

「何寝ぼけた」と言つてゐるの？ あんた氣を失つておかしくなつたの

？

「へ？」

「突然倒れるからびっくりするじゃない！」

「倒れるって？」

「あんた倒れたのよ。覚えてない？」

「い、いや・・・」

「もう～ 心配したんだから。ねえ恵ちゃん。」

恵？

恐る恐るキツの後ろを振り向いた。

そこにはあの女の子が。

「あんたが氣を失っている間ずっとこの子を見ていたのよ。迷子みたいだから。」

雄太は震えた。

「な、なんで？」

その時女の子がキツに聞こえないほど小さな声で言った。

「また遊ぼうね。お兄ちゃん。」

その後

年越しを控えたクリスマス、デパートは多くの人で活気に満ちている。

ふと見ると、ある親子が会話している。

「ねえねえお母さん。このデパートって、昔は何が建つてたの？」

幼い子供が無邪気に母親に質問していた。

「私のお婆ちゃんからね、聞いた話だと、大きいお家があつたみたいよ。」

母親が答えた。

「大きいお家？」

「うん。 そうよ。 大金持ちが住んでたみたいなの。」

「ふーん。」

子供は不思議な顔を浮かべている。

「なんでもね、昔住んでた家の人が惨殺されたみたいなの。」

「ざんせつ？」

母親はしまった、といった表情をした。

「ううん。何でもないよ。女の子を一人残してみんな消えてしまったの。」

無理に言い直した。

「消えちゃったの？」

純粹に子供は聞いてくる。

「そうよ。悪い事をしたら、閻魔さまに地獄へ連れかたかれるのよ。
弘毅君も
悪いことしないようにな。分かった？」

「はい。」

笑いながら、雄太は親子の会話に耳を傾けていた。
人から見たら、一人で笑っている雄太は不気味かもしねり。
それはさておき。

「惨殺か・・・」

もしかしてあの女の子は。

頭の中では、そんな馬鹿な、やっぱりあの子は、といつ考えが葛藤
していた。

あの子は両親達が殺されたのを真似して、ギロチンなんかを・・・

夢か、現実か。

しかしあれは夢ではないと断言できる。

なぜなら。

女の子の感触がはつきりと残っていたから。

あの家で。

またどこからか聞こえてくるかもしけない。

「 もういいかい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5060c/>

かくれんぼ

2011年1月1日13時44分発行